



2013年9月8日～13日参加

福岡教育大学 2年 靖子さん

地雷博物館

博物館に行く前にCSHDの事務所へ行った。そこでは女性4人も地雷撤去を行うスタッフとして働いていた。地雷撤去作業は金属探知機を使って行うが、地雷や爆弾だけに反応するわけではないため時間がかかる。撤去した地雷の数を記録したものが壁にかかっておりびっしりと書き込まれていた。しかし、まだカンボジアにはたくさん地雷が残っており、地道に作業をしていくしかないことが分かった。

地雷博物館ではアキラ氏が撤去した5000発もの地雷を見た。数百円で作ることができる地雷がカンボジアにはまだ残っており、被害に遭うひとや命を落とす人がいる。

地雷被害者インタビュー

5人から話を聞いた。5人中4人は既婚者で子供がいた。1人はツアーメンバーと年が近い22歳の男性だった。戦争中に軍人として戦っているときや仕事中に地雷を踏み、障害を負っていた。気づいたら足などがなく、今までと同じ生活ができないショックの大きさを話してくれた。私がナイトマーケットやアンコールワットに行ったとき、地雷被害者が楽器を演奏してお金をもらっていた。戦争は終わっても、地雷によって苦しんでいる人がいることを目の当たりにした。

義足リハビリセンター

患者の6割は地雷被害者ということだった。1人1人に合う義足や義手を作るまでにはいくつかの過程があり、微妙な調整をしていくため時間がかかる。スタッフが足りていない、作ることができる義足や義手の数に限界があるという問題があった。しかし、2010年からは国が支援していることを知り、カンボジアは変わってきているように感じた。

鬼一二三日本語教室

学校に着くと通称、おかまくんが出迎えてくれた。私たちツアーメンバーと日本語で会話をし、だじゃれも言っていた。しばらくして、鬼一二三先生からお話を聞くことができた。授業は午前6時～午後9時まで行われている。仕事をしながら通う人がいるからだ。カンボジアの人が日本語を学ぶ理由は、日本に行きたいというわけではなく、仕事（日本語ガイド）がしたいからという話を聞いた。生きるために他国の言語を必死に学ぶ、カンボジアの人の勉強に対する強い思いを感じた。



だるま愛育園

バスが到着すると子供たちが走って私たちのところへやってきた。私たちのことを「おねえさん」「おにいさん」と呼び、なわとび、折り紙、おはじき、バレーをして



一緒に遊んだ。その後、園長のソリカさんから話を聞いた。ここにいる子供たちは、親がいない、あるいは虐待を受けていた子供で郡と連絡を取り引き取ったそうだ。さっきまで遊んでいた子供たちの笑顔を思い出して子供たちは今までずっと笑って過ごし

てきたわけではないことを知った。ソリカさん自身は、3歳の時ポルポトにより親と兄弟を亡くしている。自分と同じ境遇の子を助けたいという思いからだるま愛育園を作った。ソリカさんは45人もの子どもを学校に通わせながら、子どもたちの将来のために英語、日本語、伝統的なダンスを教えている。

CMC コーンライ夢中学校

CMC テュールボンローみおつくし中学校

自分が歩いているところに数年前までは地雷が埋まっていたと思うと、人々の生活と地雷は近い存在にあると思った。建物を建てるためには地雷原を切り拓いていくしかない、そう言っていた地雷被害者の言葉を思い出した。



教室に入って、クメール語で自己紹介をした。笑っている生徒もいたので少しは伝わったのかな、と思う。その後はグループに分かれて地図の載ったプリントを見ながら現在地や日本の首都を教えあった。CMCテュールボンローみおつくし中学校では、16～20歳の男の生徒ばかりのグループに入った。英語は少しだけ、日本語は全く通じないという初めての状況で最初は戸惑ったが、手や足など体の部位を日本語とクメール語で教えあったりした。クメール語の発音は難しかった。生徒は私の発音が面白らしく笑っていたが、何度も同じ単語を繰り返し発音してくれた。笑いが絶えない交流となった。一方で、出稼ぎや家の手伝いのために学年が上がるにつれて生徒の人数が減ることを知った。

アンコールワット/アンコールトム/タ・プローム

水面に映ったアンコールワットを見たときは言葉がでなかった。またゆっくり時間をかけて見に来ようと思った。バスに乗り込む前に、物売りの子供たちに囲まれた。小さな子供たちが「1ドル!」と言いながらついてきた。私はどうしたらいいか分からなかった。

トンレサップ湖

海の地平線を見ているようだった。水上生活の町をボートに乗って見たが、どうして水の中で家を支えている木が腐らないのだろうと思った。自分たちの生活を観光客に見られて、写真を撮られるというのはいい気分はしないように感じた。しかし、観光客が乗るボートを漕ぐことが仕事の人もいたようだったので複雑だった。



ツアー全体を通して

行きの飛行機の中から外をのぞくと暗闇の中にぼつぼつと光が見えていた。私が“地雷”と“アンコールワット”をイメージするカンボジアは、どんな国で人々はどのような暮らしをしているのだろうと思っていた。

6日間のツアーを通して、ツアーメンバー、駐在員の曾田さん、ガイドのアンさん、そしてたくさんのカンボジアに住む人と会うことができた。都会では建物が建ち並び、田舎では昔の日本のような田園風景が広がり動物が放し飼いにされていた。3人乗っているバイク、その場で値段交渉するお店、日本では考えられないことが当然のことだった。日本を離れることで自分のいつもの生活を振り返り、日本について考えることができた。貧しい生活、地雷による被害などはどういう支援の形があるのかこれから調べていきたいと思っている。

日本に帰って来てから、よくカンボジアに行った時の写真を見返している。将来は小学校の先生になりたいという思いは揺るがないが、敷かれたレールをまっすぐ行くのではなくたまには外れてみるのもいいな、と考え始めた。このようなツアーを企画して頂き、本当にありがとうございました。